

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 古澤 義久

本研究は、韓半島を中心とする東北アジアの新石器時代から青銅器時代前期にかけての文化動態を土器、磨製石包丁、紡錘車、偶像・動物形土製品、岩画など多種の文化要素を統一的に扱い、その相関関係、共変動を検証することで明らかにする。

第Ⅰ部では東北アジアの土器の編年と地域性について再検討し広域編年網を構築し8段階に区分している。

Ⅰ段階では土器文化と偶像・動物形土製品の地域性は連動しており、土器文化は生業より、精神文化との関連が強いとする。

Ⅱ段階では、磨盤・磨棒や算盤珠形土製紡錘車が遼西地域を起源とし、東北アジア各地に拡がり連動した動きを示すが、この動きは極東平底土器や韓半島丸底土器の分布を越え、また、極東平底土器の分布圏を越え、東北アジア各地にみられることから環黄海の基層的な文化要素であった可能性を指摘する。

最も大きな変化があったⅧ段階に至ると多くの地域で深鉢(甕)と壺の組成、磨製石庖丁、石製紡錘車を備える「青銅器時代化」が起きる。韓半島中・南部ではこれらがⅧ段階にほぼ同時に生じ、土器も総体的には継承要素が少ない。一方、豆満江流域等では青銅器時代化は徐々に進行した。このことから韓半島中・南部と豆満江流域等では、青銅器時代化にあたって、受容する集団が異なる判断をしたとみる。

遼東地域においては小珠山上層期が大きな画期であるが、遼東山地部では遼東半島とは区分される独自の領域が形成され、韓半島中南部の刻目突帯文土器文化が成立する母胎となった。一方、韓半島南部の土器が韓半島中部に様式的な影響を及ぼすという別の動きがあった。このような二つの様相こそが韓半島中・南部に強力な青銅器時代化をもたらした要因であったとしている。

第Ⅱ部では、該期の日韓交流の様相について考察している。

韓半島南部と西北九州の交流自体は絶えず存在していたが、Ⅱ段階を除くと土器の様式に影響を与えることはなかった。韓半島からの渡航集団の主要最終目的地が対馬島であったこと、生業形態の差異、そして精神文化上の交流がほとんど存在しなかったことという理由が考えられるとする。

以上、従来の東北アジア考古学では、華北の高文化が周辺地域に拡散するという図式が多く適用されてきたが、必ずしも一方向で展開しているのではなく、各小地域があるときは核地域となり、あるときは周辺地域となるという、それぞれの小地域における自律的な動きこそが重要であったということを土器以外の各種の遺物にも目を配り、それらの綿密な分析を通じて明らかにしている。資料の不足という制約もあり、個々の分析には検討が不十分のところも見られるが、本論文が東北アジアの先史社会の動態を考える上できわめて重要な知見を明らかにしていることに疑問はない。よって、審査委員会は一致して、本論文が博士(文学)の学位を授与するにふさわしいものと判定する。